

彼の前に居たような気がする。

風が吹いて、私の耳元で、声が聞こえた気がする。

「分かっているのか？」

そんなことも分からないほど、呆けていたのだろうか。私は。

咳神が肩のあたりで、しきりと異論を唱えているのか、踊っているのか。

「分かっているのか？」

故郷の川面はぬらぬらと、油の浮いたように静まっている気がする。

今歩いている川面は、春の日がとろとろと暖かく、ゆるゆると透明な気がする。

海なめくじどもが、ゆらゆらと、海そうめんをひりだしている気がする。

聞こえる気がする。「分かっているのか？」

日が照らされて、死んでいる。

私はどうか、分からない。見えているのか。

眼球は二つとも盲いている。溶けて流れ出している。

日が照っている気がする。私は何処にいるのか。

臓物が尻から溢れて川面に向かって長く伸びている。

私は朝、飯を食らっただろうか。今は何時だ。

彼は、紅々と死んでいる。死に至っている。

私は、空に浮かぶか。地虫と添い寝しているのか。

彼は、ふくふくと太った立派な成猫だった。

私は、なぜここにいるのか。だいたい、居るのか？

彼は、多くの子をなし、多くを殺し、多くを喰らった。

私は痩せてしまったのか。私は、何の前にいるのか。

日が照って、私しの目に、青い川面が映った気がする。

「何の前にいる？」

そんなことも分からないほど、疲れていたのだろうか。私は。

彼は明らかに往生しており、ただの肉塊に過ぎないのか、歌っているのか。

「何の前にいる？」

故郷の川面でゆらゆらと、私は浮かんでいる気がする。

私を運んでいる川面は、ゆらゆらと揺れる男の前で暖かく、ぬらぬらと澄んでいるのか。

鰻どもが、ぬるりと、尻より入り込んでいる気がする。

分かった気がする。「分かった気がする。」